

慰めの訪れ

「イザヤ書」からの説教 (No.6)

【聖書箇所】 40章1節～31節

【主要聖句】 40章31節

「しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、
鷲のように翼をかって上ることができる。
走ってもたゆまず、歩いても疲れぬ。」



ベレーシート

●前回は、ユダの王ヒゼキヤの治世に強国アッシリヤがエルサレムを包囲するというその危機から守られた話を致しました。そのヒゼキヤが亡くなったのは、B.C.686年です。それから100年後のB.C.587年、エルサレムはアッシリヤの後に台頭したバビロンによって完全に破壊され、多くのユダの民はバビロンへと捕囚されます。これは神の民を再セットアップするためでした(※「再セットアップ」とはパソコン用語で、不具合を起こしてしまったデータ記憶装置の内容を消去して、パソコンを初期の状態に戻すことを意味します)。この再セットアップは、神の民にとってはきわめて厳しい神からのお取り扱いでしたが、神から見るなら、預言者エレミヤが語ったように、「それはわざわざではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのもの」(エレミヤ書 29:11)でした。

●イザヤ書40章以降の預言の背景にある歴史の舞台は、絶対専制君主国家であったバビロンが一瞬にしてペルシアの王クロスによって倒される時が近づきつつあった頃です。神の民の再セットアップ作業も最終段階に入った頃に語られた預言が記されているのです。

●40章以降は、神の民がバビロンの支配から解放される出来事とやがて終わりの時に起こる出来事が、同時に重なって語られています。「終わりの時」は神のマスタープランの最終ステージです。その最終ステージこそが「本体」であって、それまでに起こる様々な歴史の出来事はその本体を示す「型」なのです。ですから、私たちは神のマスタープランをよく学ばなければなりません。神の歴史においてこれから起こることは、すでに旧約聖書の中に、預言者たちを通して啓示されているからです。



●さて今回から、66章からなるイザヤ書の後半の部分に入っていきますが、その最初にあることばが「ナハム一、ナハム一、アンミー」、つまり、「慰めよ。慰めよ。わたしの民を」という主のことばなのです。「慰めの訪れ」と題して、神ご自身が選ばれた民に対する熱い思いが預言者を通して語られていきます。一度、神によって選ばれたイスラエルの民は、神のマスタープランにおいて、神から見捨てられてこの世から消滅してしまうこと

は決してありません。むしろメシア王国(千年王国)においては、再び諸国における支配国となるのです。その彼らを導かれるのがイエシュアなのです。今日の多くのユダヤ人たちはいまだイエシュアをメシアとして受け入れてはませんが、再臨の間際に、彼らは主から「恵みと哀願の霊」が注がれることで、民族的に目が開かれ、神に立ち帰ることが預言されています。そうした神の救いのドラマを思い描きながら、イザヤ書40章を味わってみたいと思います。

1. エルサレムに対する主の慰めの語りかけ

●イザヤ書40章は大きく二つの部分からなっています。最初の部分は1～11節まで。後の部分は12～31節までです。最初の1～11節にも二つの主の語りかけがあります。それは本来一つのものであり、慰めの訪れの内容の消極面と積極面について、右の図のように語られています。

慰めの訪れ	
1～2節 慰めを語りかけよ (優しく)	9～11節 良い知らせを告げよ 恐れず、力の限り声を上げて
〔内容〕 ①その労苦は終わった ②その咎は償われた ③罪に見合うものを十分に受けた	〔内容〕 ①見よ。あなたがたの神を ②主は力をもって来られる ③その御腕で統べ治める ④羊飼いのように

1- (1) 慰めの訪れを語る対象

【新改訳改訂第3版】イザヤ書40章1～2節

- 1 「慰めよ。慰めよ。わたしの民を」とあなたがたの神は仰せられる。
- 2 「エルサレムに優しく語りかけよ。これに呼びかけよ。

その労苦は終わり、その咎は償われた。そのすべての罪に引き替え、二倍のものを【主】の手から受けたと。」

●語るべき対象は「エルサレムの心」に向かっています。新改訳では「エルサレムに」と訳されていますが、新共同訳では原文どおりに「エルサレムの心に」と訳されています。「心」と訳されたヘブル語の「レーヴ」(לֵב)は、日本語の「心」のように、必ずしも感情や情緒を意味するものではありません。むしろ、理解力を意味します。イザヤ書6章に「この民の心を肥え鈍らせ(かたくなにし)、その耳を遠くし、その目を堅く閉ざせ。」(10節)とあるように、ヘブル語の「心」(レーヴ)の働きは理解力や悟る力を意味しています。したがって「慰めよ」とは、決してセンチメンタルな呼びかけではなく、悟りが与えられること、理解力が与えられることを意味するのです。ですから、40章12節以降では、神がどのような方であるかを知らないのか、聞いていないのかと問いかけているのです。新改訳では「心」という訳語がない代わりに、「優しく」という訳語を入れていますが、それに相当する原語はありません。ちなみに、11節の「優しく導く」の「優しく」も原語にはありません。おそらく、羊飼いとて羊を「飼う」「引き寄せる」「抱き」「導く」という行為の中にイメージされる意味合いとして、「優しく」という意識になっているように思われます。

●感情的な「優しさ」ということばのイメージにのみにとらわれることなく、主に対する客観的な洞察を深めることが実は大切です。主観的なイメージも大切ではありますが、それが特化されることで、主を知る、主のことばを悟るということが制限されてしまったりはなりません。「優しく」ということばに心がすぐに反応してしまう傾向のある人は、それで十分な気持ちになり、前節の10節にあるような、「主は力をもって来られ、その御腕で

続べ治める」という面に対する理解は往々にして希薄になってしまう懸念があるのではないかと思わされます。

●「エルサレムの心」は、やがてエルサレム(あるいはシオン)に住み、主を正しく知る者となる必要があるのです。主の全能的な力と神のご計画についての正しい理解を持つ者とならなければなりません。神を尋ね求めて悟りを得る者たち、その者たちこそ「エルサレムの心」なのではないかと思えます。その「エルサレムの心」に向かって主の慰めは語られています。

1-(2) 慰めの訪れを受けるその理由

●イザヤ書 1 章 2 節には、エルサレムの心に慰めを語るその理由が以下のように三つの事柄で記されています。原文ではそのひとつひとつに「なぜなら」という意味を表わす「キー」(קִי)という接続詞があります。これは理由を表わす接続詞です。あるいは、「まことに」という副詞的な用法として訳されることもあります。意味合いとしては同じです(岩波訳、フランシスコ会訳)。ここでは理由を表わす接続詞として解釈します。すると、エルサレムの心に呼びかける理由は以下の通りです。

- ①「なぜなら、彼女(=エルサレム)の苦役は終わったから。」
- ②「なぜなら、彼女の咎は償われたから。」
- ③「なぜなら、彼女はそのすべての罪に引き替え、二倍のものを、主の手から受けたから。」

●これらの三つの事柄は密接につながっています。「労苦」、あるいは「苦役」「服役」とも訳される原語は「ツァーヴァー」(צָוָה)で、本来的には「戦い」という意味があります。バビロンにおける捕囚は、異教の地における信仰の戦いでもあったのです。そのような「戦いが終わった」という意味にもなります。その意味で訳されるならば、バビロン捕囚の経験を越えた意味ともなります。つまり、完全に信仰の「戦いが終わる」のはメシアが再臨される時だからです。そのときには平和が実現し、かつて経験したような信仰の戦いはなくなります。

●労苦を伴う信仰の戦い、神の民であるがゆえに受ける労苦から完全に解放される時が来ます。それはメシアの再臨によってです。それは同時に、神の民の心のゆがみを表わす「咎」(「アーヴォーン」וֵוֶן)と「罪」(「ハッター」חַטָּאת)が赦される時でもあります。その「型」がバビロン捕囚からの解放の出来事でした。そしてイザヤ書40章では、神の民の「咎」が償われ、民の「罪」に引き替えて二倍のものを受けることがすべて**預言的完了形**で表わされています。**預言的完了形**とはまだ起こっていない出来事が必ず実現するという表現です。

●「二倍のもの」と訳された原語の「キフライム」(כִּפְּלַיִם)は、「重ねて」とか、「倍するもの」、あるいは「十分に」、「繰り返して」とも訳されます。ここは主の手から「倍する罰」を受けたのではなく、「倍する祝福」を受けたと理解しなければ、コンテキスト(文脈)の流れに整合性が取れません。「倍する祝福」は長子に与えられる特権です。そして神にとってこの世の諸国における長子といえばイスラエルの民です。「エルサレムの心」、すなわち、「神を尋ね求める者たち」です。

1-(3) 良い知らせを告げるべき対象

●イザヤ書40章9～11節を見てみましょう。

【新改訳改訂第3版】イザヤ書40章9～11節

9 シオンに良い知らせを伝える者よ。高い山に登れ。エルサレムに良い知らせを伝える者よ。

力の限り声をあげよ。声をあげよ。恐れるな。ユダの町々に言え。「見よ。あなたがたの神を。」

10 見よ。神である主は力をもって来られ、その御腕で統べ治める。

見よ。その報いは主とともにあり、その報酬は主の前にある。

11 主は羊飼いのように、その群れを飼い、御腕に子羊を引き寄せ、ふところに抱き、

乳を飲ませる羊を優しく導く。

●ここでは「慰め」が「良い知らせ」という表現になっています。「慰め」も「良い知らせ」も同義です。この「良い知らせ」を告げるべき対象が「シオン」、「エルサレム」、そして「ユダの町々」となっています。「シオン」は「エルサレム」の別名であり、それらは「ユダの町々」の中心地です。ですから、いわばこれらはみな同義とみなすことができます。

●そこに「良い知らせを告げる者」(単数)に対して、預言者は「力の限り声を上げよ。声を上げよ。恐れるな」と励まします。ここにも、1節の「慰めよ。慰めよ。」(ナハムー、ナハムー)と同様、動詞を重ねて意味を強調するヘブル語特有の修辞法が使われています。9節ではどこにその強調法があるかと言えば、「(声を)上げよ。上げよ。」です。「上がる」(「ルーム」**רָם**)の使役形で「ハリーミー、ハリーミー」です。1節の場合は「あなたがたはわたしの民を慰めよ。慰めよ。」で男性の複数形でしたが、ここは「あなたの声を上げよ」で女性の単数形が使われているという違いがあります。「良き知らせを告げる」伝言の役目はなんとここでは女性なのです。なぜ女性の単数形なのでしょう。こんなところに突っ込みをかけてみるのも面白いかもしれません。詩篇67篇11～12節参照。

1-(4) 「良い知らせ」とはなにか

●ところで、ここで告げ知らせるべき「良い知らせ」とは何でしょうか。それは10節にある「見よ。神である主は力をもって来られ、その御腕で統べ治める。見よ。その報いは主とともにあり、その報酬は主の前にある。」ということです。冒頭の「見よ。」(「ヒンネー」**הִנֵּה**)は、ある事柄に特別注目させるときに使われる呼びかけの語彙です。ここでの注目点は、「神である主は力をもって来られ、その御腕で統べ治める。」ということです。ここからどんな光景を思い浮かべるでしょうか。それは完全に「終わりの時」を示唆する出来事です。つまり、キリストの地上再臨によるメシア的王国の実現です。主である方は力をもって来られ、その御力をもって地を統治することが「良い知らせ」なのです。そのとき、「見よ。その報いは主とともにあり、その報酬は主の前にある。」とあります。ここでも「見よ」でそのあとに続く事柄に注目するように呼びかけています。それは、主が来られることで「その報いは主とともにあり」です。つまり、来臨される神によってもたらされる確かな祝福があるのです。「報い」とありますから、主が来られることによって、預言者を通してイスラエルに語られた主の約束が実現され、その約束を信じた者に対して「報い」が与えられるがゆえに「良き知らせ」なのです。

●ところで、その祝福の内容についてはここでは具体的には語られていませんが、イザヤ書の中には他の箇所にも、「主の来臨」によって実現する約束が預言されています。特に重要なのは、「**終わりの日に**」(2:1)とか、「**その日**」(12:1)とか、「**そのとき**」(35:5, 6)に実現する報いです。それらはすべて神のマスタープランの最終ステージで実現されることです。「**終わりの日**」には、エルサレムが世界の中心地となり、そこから主のみおしえが出るため、すべての国々がそこに流れて来ます。「**その日**」には、神の怒りは去り、神の慰めが訪れます。そして「喜びながら、救いの泉から水を汲む」ようになります。これは決して枯渇することのない神との交わりを示唆

する表現です。渇くことがなく常に満たされた状態です。「**そのとき**」には、盲人の目は開かれ、耳しいた者の耳はあけられるのです。足なえも鹿のように飛び跳ね、おしの舌は喜び歌うようになります。地の呪いは解けて、荒地には水がわき出し、荒地(砂漠)には多くの川が流れるようになります。多くの産物を産み出します。そして主の再臨によってこの地上に住む人々の基調は、「喜びと楽しみ」となります。あらゆる身体の障害はなく、おそらく、うつ病などといった心の疾患もありません。本来、人間に与えられているあらゆる領域が完全に機能するようになるからです。そうした約束が実現して、神の祝福を実際に味わえるようになるというのが、「良き知らせ」であり、「慰めの訪れ」と言えます。

●まだまだ説明不十分ですが、こうしたことが「良き知らせ」の中味なのです。生まれつき眼が見えず、耳も聞こえず、ことばも話せず、生まれつき歩いたこともない人が、歩き回り、飛び跳ね、神を賛美しつつ、走り回っている姿を想像できるでしょうか。しかも、どんなに走っても、賛美しても、疲れることがないという世界を想像できるでしょうか。今、説明したことはすべてイザヤ書に預言されていることなのです。そして、重要なことは、今述べたこれらのことはすべて人間の「からだ」とかかわる事柄だということです。

2. 主の慰めのもつ「刷新する力」

●今日は、「良き知らせ」についてのヘブル的概念を探り求めてみたいと思います。「ヒンネー」「見よ。」、実は、ここから今日のメイン・メッセージです。「良き知らせを告げる」と訳されたヘブル語動詞は「バーサル」(בָּרַשׁ)です。この「バーサル」が名詞になると「バーサール」(בְּרַשׁ)となるのです。ところが、その名詞「バーサール」は「からだ」を意味します。同じ語根(בָּרַשׁ)を持つ動詞と名詞、「良き知らせを告げる」と、「からだ(身体)」がどう結びつくのでしょうか。そこにいったいどんな秘密が隠されているのでしょうか。驚くなかれ、実は、「福音」とは、「**からだ**」に関することなのです。

●その前に、私たちはイザヤ書40章9節の最後の部分にある「**見よ。あなたがたの神を。**」ということばにしっかりと目を留めたいと思います。イザヤは、あなたがたの神を果たして知っているのか、神のはかり知れない偉大さをどれほど知っているのか、と問いかけます。

●神の「慰め」、「良き知らせ」は**力の刷新**です。このことが語られる前に、神の偉大な力について語りかけています。それが12節～26節に記されています。そこでは偶像の神にはない、神の創造的な力、全能性、無比性、至高性、無限性、無窮性、不変性、永遠性が語られます。しかし、当時のユダの人々(バビロンの捕囚となった人々)は、「私の道は隠れ、私の正しい訴えは、私の神に見過ごしにされている。」(40:27)と解決の見通しのない深刻な行き詰まりの中で生きる力を失い、疲れを覚えていたのです。しかしそんな彼らに対して預言者は語りかけます。「あなたは知らないのか。聞いていないのか。」と。そして、主はご自身を待ち望む者に驚くべき力を与えて下さるという驚くべき訪れを語るのです。

●今回は、12～26節の部分の細かな説明は省きますが、結論的部分として、28～31節を取り上げてみたいと思います。

【新改訳改訂第3版】イザヤ書40章28～31節

28 あなたは知らないのか。聞いていないのか。

【主】は永遠の神、地の果てまで創造された方。

疲れることなく、たゆむことなく、その英知は測り知れない。

29 疲れた者には力を与え、精力のない者には活気をつける。

30 若者も疲れ、たゆみ、若い男もつまずき倒れる。

31 しかし、【主】を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。

走ってもたゆまず、歩いても疲れぬ。

●特に31節は有名な聖句で、よくこの部分だけが歌詞として歌われます。信仰の励ましとして、しばしばメッセージの聖句として用いられる箇所です。ところがこの箇所にはとんでもない内容が語られているのです。驚くべきことが記されているのです。向かい風をうまく利用して高く舞い上がる鷲のように、主を待ち望むなら、新しい力を与えられて、どんな状況にもめげることなく、むしろ逆境の歩みの中でこそ信仰を強めることができるといった励ましのメッセージをよく耳にしますが、よくこのみことばを読んでみましょう。特に、「走ってもたゆまず、歩いても疲れぬ」という部分。こんなことのできる人は実際にいるでしょうか。休むことなく、走り続け、歩き続けることのできる人がいるでしょうか。とてもそんなことはできないと素直に認める人は、信仰の弱い人というレッテルを張られてしまいかねません。このみことばは、主を待ち望むことで、主を信頼することで、さまざまな障害や困難が、むしろ信仰を強める機会となるというような励ましのみことばではないのです。

●「走ってもたゆまず、歩いても疲れぬ。」という部分は、常識的に考えるならばとても無理です。ところが、「神である主が力をもって来られ、その御腕で統べ治める」メシア王国が到来するならば、このことは可能なのです。なぜなら、「疲れることなく、たゆむことなく、その英知は測り知れない」創造の神が、私たちとともに住むために、この地上において、疲れた者には力を与え、精力のない者には活気をつけることができるのです。ただし、それには私たちが復活のからだ、つまり、朽ちないからだを与えられていなければなりません。

●「新しい力を得」（新改訳）、「新たな力を得る」とありますが、原文には「新しい」ということばそれ自体はありません。原文では「主を待ち望む者たちは、力を刷新する」となっています。つまり、「力を刷新する」ことを「新たな力を得る」と訳しているのです。それは動詞「ハーラフ」(הֲלִיף)の使役形が意味することで、本来、着物を着替えるように、取り替えてしまうという意味です。また、「力」と訳された「ホーアツハ」(חֵץ)は「力、権力、能力、生産、富」を意味しますが、そうした力が刷新されるのです。土地を耕せば多くのものを生産できるのです。何かを造ろうとすれば創造的な力が働くようになります。また、神のみこころを行う力も与えられ、ことができ、神のトラーを完全に守ることができ、社会は神の愛による福祉理念が実現されるのです。力を刷新されることで、あらゆる領域において多くの豊かさをもたらされます。考えるだけでもワクワクします。今ある力ではなく、刷新された、これまでとは全く異なる力を解き放たれるからです。それが「刷新された力」、「新たな力」です。それゆえ、「走ってもたゆまず、歩いても疲れぬ。」のです。ますます鷲のように高いレベルへと上ることができるのです。

●バビロン捕囚からの解放の時は、そのような「走ってもたゆまず、歩いても疲れぬ。」というような力は与えられていませんでした。ですから、帰還したユダの周辺の人々から神殿建設に対する妨害が起ったり、自分た

ちの生活が苦しくなったりしたときに、かつての意気込みは喪失してしまいました。後に、エズラの呼びかけによって霊が奮い立たせられて、再び神殿建設に励んで完成させたにもかかわらず、ここのイザヤ書40章で語られているような「新しい力」は与えられていません。

●主を待ち望む者に与えられる力は、私たちの想像を越えるものです。今ある力にプラスされるような力ではなく、全く異なる力、刷新された力が身を支配するのですから、「走ってもたゆまず、歩いても疲れぬ。」のです。このことを文字通り信じなければなりません。

●しばしば天国では何をするのか。そこへ行ったとしてもヒマでしょうがないのではと考える人がいるようですが、イメージは全く逆です。想像をはるかに越えた刷新された力を着せられているのに、ヒマで退屈でということはありません。やる気が起こらない、生きる目標がないといったうつ症状は、天の御国では全く考えられないことなのです。

●主が力をもってこの地上を統治されるのは、キリストの地上再臨後です。そのときには、すでに携挙されて天にいるキリストの花嫁である教会はキリストとともに地上に来ます。そのときにはすでに朽ちないからだを与えられているので、病気になることもなく、また、死ぬことさえありません。患難時代に信仰のゆえに殉教した人々はキリストの再臨の時によみがえり、やはり復活して朽ちないからだを与えられています。ただ、千年王国では生きたまま復活のからだをもたずに流れ込む人々があります。しかしそのような人々も病気になることはほとんどないはずで、地には平和が訪れ、神の教えによって人々が愛し合って生きようになるため、ほとんどストレスのない健康な身体を与えられると考えられます。ですから、「走ってもたゆまず、歩いても疲れぬ。」のです。それはまた「聖霊に満たされた姿」とも言えます。「聖霊に満たされる」と言うと、なにか特別な人の事を言っているように思われますが、御国の世界ではそれが普通であり、標準なのだということです。メシア王国(千年王国)は刷新された力を与えられて生きる、きわめて活動的な世界と言えます。そんな世界がやがて来ることを信じて待ち望む者は、なんと幸いです。

●メシアの再臨は自然界だけでなく、私たち人間の身体にも大きな変化をもたらします。それは朽ちることのない復活のからだを与えられるからです。これが「良き訪れ」なのです。どうしてこのことが「良き訪れ」なのかと言えば、人間はからだなしに神の栄光を現わすことができないからです。「良き訪れ」とは、障害の全くない世界で、人間に与えられたからだのすべての機能が完全に発揮できるようになるからです。それは罪に支配されない身体であるゆえに、また、愛する主のために生きるゆえに、復活のからだは疲れることがなく最高度に活かされるのです。そんな世界がくることをイザヤは預言しているのです。

最後に (瞑想の課題としての「からだの不可欠性」)

●使徒パウロは「私たちは、見えるものではなく、見えないものに目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。」と述べたあとに、Ⅱコリント5章で興味深いことを述べています。

【新改訳改訂第3版】Ⅱコリント5章1～7節

- 1 私たちの**住まい**である地上の**幕屋**がこわれても、神の下さる**建物**があることを、私たちは知っています。
それは、人の手によらない、天にある**永遠の家**です。
- 2 私たちはこの**幕屋**にあつてうめき、この**天から与えられる住まい**を着たいと望んでいます。
- 3 それを着たなら、私たちは裸の状態になることはないからです。
- 4 確かにこの**幕屋**の中にいる間は、私たちは重荷を負って、うめいています。
それは、この**幕屋**を脱ぎたいと思うからでなく、かえって**天からの住まい**を着たいからです。
そのことによって、死ぬべきものがいのちのまれてしまうためにです。
- 5 私たちをこのことにかなう者としてくださった方は神です。神は、その保証として御霊を下さいました。
- 6 そういふわけで、私たちはいつも心強いのです。・・・
- 7 確かに、私たちは見るところによってではなく、信仰によって歩んでいます。

●ここには、「住まい」「幕屋」「建物」「永遠の家」といった用語が使われています。これらはすべて神と人とがともに住む「家」を表わす語彙です。パウロは「住まい」という象徴を用いて、やがて壊れてしまう地上の幕屋から、やがて壊れることのない神の建物、天から与えられる住まいへの刷新があることを確信しています。「住まい」という概念は、「からだ」という概念でも表わされます。神と人がともに住むためには「住まいとしての家」が必要であるように、神と人とがともに交わるためには「からだ」が必要なのです。私たちが永遠に神と交わり、また神の栄光を現わすためには、からだは必要不可欠なのです。しかしそのからだは、朽ちるからだではなく、朽ちないからだに刷新されてこそ、はじめて神と人とが永遠に交わりを持つことができるのです。イエシュアのからだの復活はそのための良き知らせを私たちに告げ知らせているのです。

●ヘブル的視点における「家」の概念、および「からだ」の概念は表象が異なるだけで、永遠の御国においてつながっています。このことは瞑想の課題としておきたいと思います。

2014.10.12